川上宏奨学金受給研究成果報告書

研究題目：日本の予防接種・ワクチン禍をめぐる新聞報道――終戦からコロナ禍まで

１．研究目的

本研究は、戦後日本の予防接種・ワクチン禍において、副反応に対する社会的認識がいかに形成され、変化してきたかを明らかにすることを目的としている。具体的には、次の二つの論点に着目した。第一に、戦後間もない日本では副反応が個々の体質の問題と考えられており、「特異体質」という耳慣れない言葉が使われていたが、「特異体質」という概念はどのように形成され、具体的に何を指していたのか。第二に、副反応を被害者の体質に帰着させる論理は、副反応問題の顕在化以前と以後でどのような違いがあるのか。副反応問題は 1970 年代に顕在化したもので、この前後で論理が大きく変わったと本稿は考えた。この問いを明らかにするために、戦後日本の予防接種・ワクチン禍における副反応に関する新聞報道を分析した。

２．研究方法

本研究では新聞報道の歴史的な比較研究をおこなった。新聞報道を分析対象としたのは、当時の社会の視点や認識を直接的に反映しており、特定の時期における社会の反応や議論を把握するための貴重な資料と言えるからである。まず、1945～2024 年の『読売新聞』と『朝日新聞』の記事を分析対象として選定した。「予防接種」や「ワクチン」といったキーワードは多くの異なる文脈で使用され、具体的な問題や事象に焦点を絞るのが難しい。そこで、それぞれの時期の予防接種禍を取り上げ、分析対象とした。分析に選んだ予防接種禍は、京都・島根ジフテリア予防接種禍事件（1948 年）、ポリオ生ワクチン禍（1960 年代）、種痘禍（1970 年代）、MMR ワクチン禍（1989～1993 年）、HPV ワクチン禍（2010～2013 年）、新型コロナワクチン禍（2020 年）である。

３．研究結果・考察

まず、副反応問題が顕在化する以前は、医学的知見の欠如から「特異体質」論が受け入れられていた。しかし、科学的手法に基づいた医学知識が蓄積されるにつれ、新たに副反応による健康被害者への誤解や偏見が生じるようになった。以下、順番に確認したい。

占領期から 1960 年代後半にかけて、副反応の原因を「特異体質」に帰着させる傾向が見られた。このアプローチは、当時の医学的知見の限界から受容されていたのである。「特異

体質」という概念は、戦前から存在し、致命的な欠陥から一般的な体質差異へとその解釈が変化してきたものであった。

しかし、1970 年代に副反応問題が顕在化し、1990 年代頃には「特異体質」論は用いられなくなった。科学的言説と個々人の体質を尊重する考え方が優勢となり、副反応を体質と結びつける語りは一時的に姿を消した。

それが再び見られたのは、2013 年の HPV ワクチン禍においてである。HPV ワクチン接種後の副反応が「心身の反応」として医学的に判断され、詐病扱いを受けた。「特異体質」を廃した医学的知見が、かえって副反応による健康被害者の誤解や偏見を助長する結果となったのである。

ただし、本稿にはいくつかの分析の限界がある。まず、分析対象を新聞に限ったため、その他被害者団体や行政機関の関連資料などを参照することが出来ず、多様な視点を網羅することは出来なかった。次に、副反応に関する個々の体験や証言は主観的な要素が含まれており、完全に客観的なデータとは言えない。最後に、医学的知見と社会的認識の変化は多面的であり、単一の要因で説明することは難しいと考える。これらの限界を踏まえつつ、本稿は副反応の歴史的および社会的背景を理解する一助となることを目指した。

４．謝辞

本研究の遂行にあたり、奨学金を給付してくださった故川上宏先生とご家族、関係者の皆様に深く感謝申し上げます。奨学金をいただけたおかげで、調査にかかる書籍代や交通費を案じることなく、専心して調査に取り組むことができました。本当にありがとうございました。